



私たちの家族

日本新使徒教会ニュースレター

2015年(平成27年)第6号・新使徒教会日本教区発行

The Newsletter of the New Apostolic Church Japan Number 6, 2015

〒206-0014 東京都多摩市乞田 1320(本部) Tel. 042-374-0070

〒799-2468 愛媛県松山市小川甲 110 番地 17 Tel. & Fax. 089-994-3556

編集者: ヴォルフガング・R. アーデ Tel 090-6923-0115

矢幡 賢治 E-mail: nac_matsuyama@ybb.ne.jp

(新使徒教会英語版ホームページ Current Word of Month より)

無名の使者

アラムの王の軍司令官であったナアマンは、皮膚病を患っていました。ナアマンは、イスラエルから捕虜として連れて来た一人の少女から、たまたま預言者

エリシャのこ
とを知りまし
た。エリシャ
なら自分の皮
膚病を治せる
ということだ
した。多少の
誤解があった
にせよ、ナア
マンはなんと
かその少女の
居所を突き止
めました。そ



して、馬や戦車も含め、多くの従者を引き連れて、エリシャの家の玄関で立ち止まりました。ナアマンは、乗っていた馬車から、期待感を持って、エリシャの家の玄関を見つめました。ナアマンは、いつかエリシャが自分のことを、有名かつ畏れ多い長官として尊敬してくれるだろうと思っていました。ところがエリシャにその様子はありませんでした。代わりにエリシャの僕が、彼の家から出てきて、ナアマンの乗っている馬車に近づき、皮膚病を治すのにすべき指示を伝達しました。

この僕は、聖書の中ではそれほど重要な人物として描かれておらず、名前も紹介されていません。ただの伝令でしかないのです——つまり、無名の使者です。

イエス・キ
リストは全人
類に救いをも
たらし、罪か
ら助け出そう
と願っておら
れます。その
ために、御自
分の使者であ
る使徒を遣わ
しておられる
のです。使徒
職を担ってい

る人物が重要なわけではありません。主の御名と任務によって来ていることが、重要なのです。お遣わしになったお方から託された伝達事項を、正確に伝えることが、重要なのです。それぞれの環境の中で、救いを得るためにしなければならないことを伝えることが、重要なのです。

以上が、職務に対する私たちの考え方でありませぬ。使徒職は私たちにとって聖なるものであります。なぜなら使徒職は、人格や個性に依存しないからです。

主使徒の礼拝からの所感

三位一体の神、我らの父

ペンテコステの日、多摩教会と松山教会において、主使徒のメッセージを聞くことができました。その中で、悪と戦うことの大切さを教わりました。神はそのために必要な道具を私たちに下さいます。道具とは、聖霊の力であります。天のお父様は、この聖霊の力を享受するためのチャンスを、今も下さいます。私たちは、御霊の証印を受けた時に、使徒を通して聖霊という賜物をいただいたのです。その聖霊が実をつけて下さるために、誘惑に遭っても神の霊が私たちの心の中で働けるようにすることは、神の子一人ひとりの務めです。神様は戦うための力も与えて下さいます。つまり、私たちが神を信頼し、祈りを通して堅忍不拔を貫き、福音書にかかっているようにイエスに似た者となるために日々努力する、ということでもあります。

ペンテコステの前の日曜日、私たちは、弟子たちが聖霊の注ぎを待ち望んでいた時のことについて教わりました。「上からの力」とは聖霊を表しています。聖

霊とは、三位一体における第三位格の神であるだけでなく、人を動かして新しい始まりへと促して導く賜物でもあります。

ペンテコステは、聖霊が現された日、キリストの教会が誕生した日ともされています。私たちは教会で、聖霊の臨在とその働きによって、改めてペンテコステの喜びを満喫しました。聖霊は私たちが神に近づけて下さいます。こうしたお招きを受け入れて、使徒を通じてキリスト再臨に備える者たちは、キリストとの親しい交わりを渴望し、隣人と共にペンテコステを喜ぶのです。

ペンテコステは、父、御子、御霊なる神が最後に御自身を啓示された日でもあります。このペンテコステによって、神が三位一体である、ということが、全世界に明らかにされたのです。毎回、祝祷を以て礼拝を終える時、私たちはこのことを思い起こすのです。イエスの恵み、神の愛、聖霊の親しき交わりに与る神の子たちの群れを求めていきましょう！

(新使徒教会英語版ホームページ nac.today より)

聖霊が私たちが神に導いて下さる

聖霊の力を確信し、信頼しなさい…。2015年ペンテコステでは、こう励ましていただきました。聖霊は、私たちが神へと導く道である——これはジャン＝ルーク・シュナイダー主使徒によるメッセージの中で最も中心となる部分であります。

「神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えてくださいます。」シュナイダー主使徒は、ザンビアのルサカで行われたペンテコステ礼拝で、特にコリントの信徒への手紙一 10章 13節のこの部分を強調し、過去のペンテコステメッセージと同程度に重要な位置づけをしました。

主使徒はこう述べています「神は真実なお方であり、私たちがどのような苦難に遭っても、必ず逃れる道が用意されていることを、約束して下さい。逃れ道とは、教会における聖霊の臨在とその働きであります。」

聖霊の働き

主使徒は聖霊の力とその働きについて解説をしましたが、その概要は以下のとおりです：

- キリストの教会において福音が宣べ伝えられているときには、必ず聖霊が臨在し、活動しておられます。聖霊はこうお召しになります「神のところに来なさい。」主使徒はこう述べました「心配しないで。聖霊の力を信じなさい。千年の平和王国が終わるまでに、良きおとずれつまり福音を、すべての人が聞くことになります。」
- 聖霊の力は、バプテスマに与った者たちを、キリストの教会へと呼び寄せ、罪と戦うための力を彼らに与えます。さらに主使徒は次のように言いました「信仰に忠実なキリスト教徒は、そ

の一人ひとりが悪しき者の奴隷にならず、悪しき者と戦うために必要な力を授かるという喜びを享受できます。」

- 「聖霊の力を十分に発揮するのは、使徒職を通してであります。イエス様は、御自分の花嫁とするための選ばれた魂を召し出すために、使徒職をお遣わしになりました。キリストの花嫁となるために神から選ばれたすべての者たちは、使徒職によって召され、使徒職から御霊の証印を受け、準備が整うのです。」
- 聖霊の力は、聖餐を通して体験することができます。神の子が聖餐に与ると、聖霊を通してイエス様が御自身を現されます。このキリストにある喜びは、会衆の大小に関係なく、すべての教会で体験します。

花嫁の会衆はどう応えるべきか

聖霊からのお召しに、私たちは応える必要があります。主使徒は次のように述べております「キリストの花嫁たちは、聖霊に満ちています。つまりキリストの花嫁はすべての人に向けて『ありのままに来て下さい。』



神は皆さんを愛しておられますよ。私も皆さんを愛しております。あなたがどのような方であろうと、私はあなたを愛しております』と告げることができる、ということです。」

主使徒はさらに次のように述べました「花嫁はキリストを愛します。信仰に忠実な者たちは、キリストとの親しい交わりを渴望します。花嫁がまず望むことは、イエスと一緒にいられることです。ですから祈りを通して『どうか来て下さい!』と嘆願するのです。」

(新使徒教会英語版ホームページ nac.today より)

主にある喜びは我らの力

人生がいつも喜びに満ちているとは限りません。悲しい時もあります。今回は、「キリストにあって喜ぼう」という今年の標語について、ブラジル・ポリビア担当のエドゥアルド・モンテス・デ・オカ・ダイキ教区使徒が、論じております。

ユダがペルシャ帝国の一部となっていた頃、ネヘミヤは国王の酒の酌しやくをする仕事をしていました。しかし、エルサレムの町が荒廃してしまったことを知り、涙を流し、元気をなくしていました。ネヘミヤが悲しむ様子を知った国王は、ネヘミヤを総督としてエルサレムへの派遣を許可し、町の再興を命じました。

ネヘミヤは、エルサレムに着くと、その日の夜に極秘に町を調査し、復興計画を立てました。この計画は多くの技術と並々ならぬ熱意によって実行され、城壁の修復や再建はわずか五十二日で終了しました。とはいえ、たやすい事業ではありませんでした。城壁の修復に当たる一方で、脅威となっていた近隣の敵国からの防御にも従事していたのです(ネヘミヤ 4:17)。ネヘミヤはこうした人々を励まし、こう告げました「悲

しんではならない。主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である」(ネヘミヤ 8:10)。

主使徒は、私たちが信仰に常に立脚し、成長できるように、2015年の標語によって、私たちを励まして下さいます。

私たちの中には、このネヘミヤのように、深い悲しみに遭っている人がいるかもしれません。しかし絶対にあきらめないようにしましょう。私たちは、自分の魂への働きかけや、自分の魂の構築を継続しなければなりません。私たちは様々な力の源を引き出したり、主から力の源をいただいたりすることができるのです。この力の源から、必要なものをすべて獲得したり、喜びを再び自分の魂に呼び込めるようにしたりできるのです。私たちは次のようなことを実行すること

によって、喜びを見出すことができます。

- 礼拝で聞く御言葉と、それを信仰の心で受け入れること
- 罪の赦しと、それを信仰によって掴み取ること
- 自覚を持って聖餐に加わること

- 熱心に祈ること

私たちは皆、必ずこうした力の源を引き出し、この力の源から必要な強さを得ることができます。そして、永遠の目標へと自信を持って歩み続けることができるのです。

(新使徒教会英語版ホームページ nac.today より)

体験を共有する

祭壇から宣べ伝えられることと、実際に体験することには、しばしば大きな食い違いがあります。このような事態をどう対処すべきでしょうか。この問いの答えを、主使徒は最近の礼拝の中で示して下さいました。さらに主使徒は、義を行うこと——自分のためだけでなく——の重要性を明らかにしております。

2015年5月17日にドイツ中央部の都市エアフルトで行われた礼拝には、約3,300名が出席しました。この日の中心行事は、中央ドイツ青年大会でした。主使徒は基調聖句として、使徒言行録22章14-15節を引用しました「アナニアは言いました。『わたしたちの先祖の神が、あなたをお選びになった。それは、御心を悟らせ、あの正しい方に会わせて、その口からの声を聞かせるためです。あなたは、見聞きしたことについて、すべての人に対してその方の証人となる者だからです。』」

恵みを得るに値する者は誰一人いない

主使徒は、使徒パウロを例に挙げて、次のように述べました「神様が皆さんをお選びになったのです。この選びは恵みの表れです。恵みを得る資格は、私たちにありません。」さらに次のように続けました「私たちはたまたまキリスト教徒になったわけではありません。神がよくお考えになり、特別に私たちを選んで下さったのです。皆さんがここにいるのは、お父さんお母さんがこの教会に所属していたからではありません。皆さんがキリスト教徒なのは、なにも皆さんがドイツやポーランドで生まれたからではないのです。皆さん一人ひとりが、神によって選ばれているのです。神様が皆さんを特別にお選びになったのは、皆さんが他にもない、皆さんだからなのです！」

「神様は、すでに私たちに益となるような決断を下して下さいました。しかし私たちには、自分の好きなようにものごとをする自由があります。神の選びを受け入れることも受け入れないこともできます。どちらかを決めることができるのです。しかし決めるためには、そもそも神の選びがどういうことなのかを知る必要があります。私たちが選ばれたのは、私たちが神の御旨を行うためであります。神様は、私たちに救いをもた

らすために、私たちを選んで下さったのです。成長してキリストに似た者となるように、ほかの人ではなく私たちをお選びになったのです。」

道、目標、訓練

さらに主使徒はこう述べました「この目標に至る道をお造りになったのも、御旨であります。この道は、信仰、再生、聖餐、服従という道であります。この道は、私たちが造ったわけではありません。主が御自分でお造りになったのです。私たちが御旨について知っておくべき三つ目の側面があります。神が私たちに下さるものを、神はほかの人々にも与えてほしいと願っておられます。人々に福音を伝えることは、一人ひとりのキリスト教徒に召されていることであります。神による救いの御計画を補佐することは、すべてのキリスト教徒に召されていることであります。私たちには未来があります。平和の御国において、これまでこの世に生を受けたすべての人類に、私たちが福音を宣べ伝えるのです。」

「未来においてこの召命に与り、この業を行えるようになるためには、訓練が必要です。主を見聞きできるようにならなくてははいけません。人々は、ありとあらゆることを、愛の神にやってほしいと思っています。ところが、聖霊から学ぶことが増えれば増えるほど、神の愛がわかってきます。主イエスによる救いの働きを通して、神の愛を知ることができます。それは、犠牲の業であり、復活であり、約束であります。これらはまさに、イエスの愛を表現しています。」そこで、私たちの隣人——もしかしたらその隣人は、猫背であったり変わった人であったりするかもしれませんが——を見かけた時に、私たちに何がわかるのでしょうか。主の働きがわかるのです！」

神は卑しめられた人たちの真ん中に留まれる (2)

(前号より)

神は「苦しめられた」人たちと共に働きたいと思っておられます。苦しめられた人たちは、自分たちに恵みが必要であることを自覚しているからです。私たちには徳がありません。自分の力で何も創り出すことはできないのです。私たちは自分が救われるためなら、何でもできます。私たちは神の憐れみに頼るしかありません。霊的に苦しんでおり、神の憐れみに頼るしかありません。ですからへりくだり、隣人をいつでも救おうと心がけるのです。なぜなら「自分に恵みが必要である」ことを自覚しているからです。また恵みを体験できることに感謝します。私たちも「苦しめられた民」となりましょう。私たちは皆、神の憐れみにすがっているのです。あまりに小さな者であるために、神の愛を図り知ることができないことを自覚している、苦しめられた民になりたいと思います。人はいつも、神を図り知ろうとします。あるいは神のところに行って、「あなたはなぜそんなことをなさるのですか」などと神に説明を求めます。そのようなことはすべきではありません。兄弟姉妹の皆さん、私たちは苦しめられた民であり続けましょう。神を図り知ることなどできないのです。神はあまりに偉大なお方、崇高なお方であるためです。ひたすら神を信頼するのです。神についての解明などしなくても、神のなさることなさらぬことにいちいち理由を知ろうとしなくても、神を信頼します。これこそ霊的に苦しめられた民のあるべき姿勢であります。神無しでは、存在し得ないのです。神無しでは、救いに与えることはできないのです。神から遠のいていけば、喜ぶことができません。神と通じていることで、喜ぶことができます。神から遠く離れたこの世にいるのはつらいことです。ある女性と恋愛関係にある男性のように、その男女が離ればなれになることは、男性にとってつらいことです。できるだけ早く彼女に会いたいと思います。このように、私たちが神と離れていることは、良くないのです。

苦しめられ、卑しめられた民であっても、うれしいことはあり、恐れる必要はない、と預言者ゼファニヤは述べています。神の恵みに与れること、神の御臨在に与れること、そして神が完成させて下さると確信によって、喜ぶことができるのです。私たちは確信を持って未来を見据えることができます。神

が完成させて下さることを、確信しているからです。苦しめられた民は、神の働きを体験できます。神の働きを、その回数や、この世に与える影響で評価することはできません。この世においてキリスト教の規模が縮小しつつあるとしても、私たちは失望しません。神は御自分の計画を進めるために、少数の人しか必要としておられないのです。

繰り返し恵みを体験すると、神が私たちの真ん中におられること、私たちが忘れておられないことを知ると、神の業が継続していること、完成に向かって御業が進められているのを知ると、失望したり、力なく手を垂れたりする理由など無くなります。祈りを止める理由もありません。

統計を見ると、これ以上祈っても無駄だと思いかもしれません。しかし皆さんが神を体験するたびに、神に祈る理由も、感謝する理由もあります。憐れみを必要としていることを自覚しているなら、常に祈る必要があることはわかります。神が完成させて下さることを自覚しているなら、「主よ、自分もそれに加えて下さい」と祈ります。皆さんは隣人のためにも祈ります。主よ、私の隣人をお救い下さい。彼らを忘れないで下さい」と祈るのです。皆さんは御業の完成を求めて祈ります。勇気と忍耐を失ってははいけません。力なく手を垂れてはならないのです。皆さんは主にあって喜ぶことができますし、確信があるわけですから、働き続けます。決して倦むことなく奉仕します。「愛をもって働こう」というスローガンを忘れないで下さい。力なく手を垂れてはならないのです。

最後に、もう一つ申し上げたいと思います。力なく手を垂れず、献金を引き続き捧げる、ということです。



これは、教会の収入を増やそうということではありません。神との関係に関わることです。

気持ちが偶像のようなものに向けば、ふさわしい姿勢で献金しなくなり、神に喜ばれません。献金についての正しい理解がなければ、「どうして献金しなければいけないのか。献金しても無意味ではないか。どこに祝福があるというのか。生活だって苦しいのに」と感じるようになります。しかし、もし神を体験していれば、恵みの壮大さがわかっていれば、感謝の気持ちで献金できます。神の働きを理解し、神がなさろうとしていることを認識し、喫緊の課題、すなわち救いの御計画における次なる段階のための備えを自覚し、自分もそれに関わりたいと思うならば、犠牲を捧げます。

私たちがこの世にいる限り、新使徒教会には、与えられている任務を果たすための資源が必要です。これも献金する理由です。教会の中で行われていることを知っている人たちは、それに与りたいと思っているのです。すなわち、神が救いの御計画における次の段階を準備しておられる、ということです。

私たちは自分たちの主なるお方に感謝し、自分たちがいかに祝福を頼りとしているかをお示ししたいと思います。このことはノルウェーに限ったことではなく、全世界あらゆる地域で実行したい事柄であります。私たちは小さいものであり、苦しめられた民であります。この苦しみの中であって、神は私たちに祝福して下さるのです。この霊的な貧困状態に置かれることによって、神を見出し、悟ることができるのです。神は御自身がお始めになったことを、完成されます。ですから私たちも倦むことなく祈り、神に仕え、献金を捧げます。そうすることによって、主がおいでになった時に、私たちは一緒に御国に引き上げていただけるのです。

愛する兄弟姉妹の皆さん、私たちは苦しめられた民ですから、けさも恵みが必要であることを自覚します。「あなたは私がやってあげたことをわかっておられますか。あなたのためにどんな犠牲を払ったか、わかっていますか」などと言うために、神のところに来たのではありません。謙虚な姿勢で主イエスのところに詣でて、「恵みに与れますように。あなたの恵みがなければ、私は路頭に迷います。」と申し上げるのです。私たちは謙虚な姿勢で主に詣でたいと思います。

私たちは親愛なる神を何度となく体験し、神の御計画も知っております。ですから力なく手を垂れよう

とは思いません。和解の手を力なく垂れようとは思いません。和解の手は、隣人とうまくやっていくことに苦痛を感じてしまうと、弱くなり、効果を発揮しません。私たちに腹を立てている人が、私たちを赦そうとは思いません。このことについても、神は私たち一人ひとりに「和解の手を弱めてはならない」と告げておられます。何度もがんばってみましょう。そうすれば主は皆さんと共にいて下さいます。そうしていくうちに、ついには雪解けとなって、隣人も和解しようとする気持ちになってくれるでしょう。あきらめることなく和解に努めましょう。私たちは何度も何度も赦し、和解しようとする気持ちを持っているものです。簡単なことでないということは、私個人の体験からも感じます。しかし神様に強めていただくならば、神の子なら誰でもできます。和解を五十回試みてうまくいかなければ、五十一回目を試みます。

レナート・R・コルプ教区使徒

私たちは自分自身を哀れに感じる必要がありません。なぜなら私たちは「卑しめられた民」であり、神のお考えと自分たちとが異なることを理解しているからです。

ベルント・コーベルシュタイン教区使徒

「力なく手を垂れるな」——お互いに手を伸ばして、天の故郷に到達するまで、助け合いましょう。

ヴィルヘルム・ホイヤー使徒

神の御子はきっと、今でも時々、礼拝堂の一番の後ろの席に座っておられるのではないのでしょうか。その席近くにある献金箱に、私たちは静かに献金を捧げます。あの貧しいやもめのように。

まとめ

- 苦しめられ、卑しめられた民は喜ぶことができます。
- 神は彼らに恵みをお与えになります。
- 民は神の御臨在を体験しています。
- 神は彼らと共に、救いの御計画を実行されます。

神への信頼はキリストにある喜びを創り出す

「キリストにある喜び」は、実現すべき事柄だけではありません。人生においては、答えが出そうにない疑問が生じることもあります。ノルベルト・カルロス・パッスーニ教区使徒は預言者ハバククの足跡を追い、その答えを試みています。



主使徒による年初の言葉は、ハバクク書から引用されたものであります。この預言書では、キリストの花嫁が持つ特有の性質に力点が置かれて書かれています。それが主にある喜びであります。

私はハバククが書いたすべてのことを詳細に読み、ハバクク自身や、彼の人生や彼に与えられた任務についてより多くのことを知ろうと試みました。ところが仮説はさておき具体的な事柄について知ることはできませんでした。ハバククの人物像を窺い知ることのできるような記述さえ見つからなかったのです。そこで私は「ハバククの考え方が基本的に彼と同世代の人々とそう変わらないだろうから、ハバククの人物像を特定したり、彼の個人的な事柄について考えたりする必要は無いのかもしれない」と思うようになりました。

ハバククが不法に対して不満を訴える

ハバクク書は神と彼との会話で始まります。ハバククはこう言っています「主よ、わたしが助けを求めて叫んでいるのに／いつまで、あなたは聞いてくださらないのか。わたしが、あなたに『不法』と訴えているのに／あなたは助けてくださらない」(ハバクク 1:2)。彼は、当時の民衆が絶えず不法と暴力に晒されていたことを嘆いています。「いつまで」という問いかけは、自分の力が限界に達したことを表しているのです。問いかけに答えていただける希望さえも失いつつあったのです。何の変化も無いと思っていたのです。

神から最初にいただいた答えによって、彼はいっそう混乱します。神は、カルデア人を使って人々の悪を罰する、とお答えになったのです。そこでハバククは、

なぜ邪悪な者たちを使って義なる者たちを罰しようとなさるのかを、神に尋ねます。神による一連の行動によって、多くの疑問を持ち、困惑したからであります。

神への信頼

ハバクク書 2 章で、神はハバククに御自分を全面的に信頼してほしいと説き、こうまとめておられます「しかし義人はその信仰によって生きる」(4 節口語訳)。「信仰」とは忠誠心と強い信頼を意味します。このことが信じる者たちに示されているのです。この答えは神の最初の御心と一致しませんが、これは信仰生活を導く原理であり、大きな可能性をもたらすものであります。

預言者ハバククは、この言葉の意味を理解します。この答えによって、いわば、神は自分にとってどのようなお方なのかを理解したのです。

克服するまでの時間

そして、ハバククは次のように結んでいます「しかし、わたしは主によって喜び…」。ハバクク書に事実と異なる記述はありません。すべて見たり感じたりしたことがそのまま書かれています。虚飾も一切ありません。ハバククはいろいろなことを体験したり感じたりしながらも、次のように述べています「しかし、わたしは主によって喜び／わが救いの神のゆえに踊る」(ハバクク 3:18)。

預言者ハバククはたくさんのかを克服しました。主は、彼に時間を与え、自分の価値判断を克服できるようにされました。辛い現実に向き合わなければならぬことに変わりはありませんでしたが、彼自身の根本が変わったのです。神はハバククに、現実ではなく、御自身との絆を再確認するようにお勧めになりました。ハバククは神を信頼できたからこそ、本当に喜べる要因を見つけることができたのです。私たちがどのような状況に置かれようとも、私たちはいつも喜ぶことができるのです。

神は静寂の中で見出すことができる

キリストにおいて喜びを体験するためには、物事を注意して聞くようにしなければならないことがあります。静寂の中で神に近くにご一緒いただくことによって、喜びを見出すことができます。その喜びから力を引き出すことができます。ノルトライン・ヴェストファーレン教区のライナー・シュトルク教区使徒は、2015年の標語を説明する際に、このことを指摘しております。



2015年の標語は「キリストにある喜び」であります。主使徒は今年の新年礼拝で、ハバクク書3章18節を引用しました「しかし、わたしは主によって喜び／わが救いの神のゆえに踊る。」先日、私はハバクク書をじっくり読んでみました。この預言者については、あまりよく知られていません。預言書も三つの章しかありません。彼は、キリストが活躍される約700年前の人物とされております。当時、イスラエルの人々はすっかり神に背を向けていました。神の掟や聖なる秩序を蔑ろにしました。預言者ハバククは、人々を神に立ち返らせる任務を与えられていました。イスラエルの人々は悔い改めて、神に立ち返る必要があったのです。

神の御旨や流儀を見出す

ハバククにとって、任務の遂行はほぼ不可能でした。彼は次のように書いています「主よ、わたしが助けを求めて叫んでいるのに／いつまで、あなたは聞いてくださらないのか。わたしが、あなたに『不法』と訴えているのに／あなたは助けてくださらない」(ハバクク1:2)。しかし彼はなんとか踏みとどまって、主にある喜びによって、力を得ました。

ハバククはどのようにして力を得たのでしょうか。それを示唆する記述が2章20節に書かれています「しかし、主はその聖なる神殿におられる。全地よ、御前に沈黙せよ。」ハバククは、任務を果たすために、神殿にある至聖所を詣で、己の欲を抑え、神とつながりを持ち、祈りを通して神の御旨を見出そうとしました。

主はあなたがたの代わりに戦って下さる

救いの歴史を見ると、神が御自分の僕をお助けになる様子を証しする出来事は、無数にあります。その一つが、エジプトを脱出したイスラエルの民が紅海についた時のことでもあります。彼らが神の助けや祝福を受け、エジプトの地に十の疫病がもたらされた直後のことでもあります。イスラエルの人々は勝ち誇ったように自由に向かって歩みました。神は雲の柱と火の柱を用いて彼らを先導されました。ところがイスラエルの人々にとってほぼ絶望的な状況がおとずれました。ファラオの戦車が、紅海沿岸にいる彼らに、追いつこうとしていたのです。

イスラエルの人々は、どうしたらよいかわからなくなってしまいました。そしてモーセに対して怒りと自暴自棄の感情をあらわにしました。しかしモーセは冷静でした。モーセは神だけを見つめて、助けを待ちました。モーセは人々にこう言いました「水が海を覆うように／大地は主の栄光の知識で満たされる」(出エジプト14:14)。神は人々を救うため、彼らとエジプトとの間にある水域を分けられたのです。

私たちの教会が置かれている状況も難しい時があります。この点について議論もされてきましたが、ここで詳細を申し上げるつもりはありません。どうかこれまで以上に、未来に向かって、祈りの中で、また崇める中で、静かに、神との親近感を求めていきましょう。そして聖霊から鼓動が伝わるのを待ち、それに耳を傾けましょう。

私は、神が私たちに助けて下さることを確信しています。私たちが抱えている問題や苦悩、しばしば感じる脱力感や無力感は、その多くがこのキリストによる喜びに変わるでしょう。そして、ただ任務を遂行するための力だけでなく、愛する人と適切な日常生活を送るための力もつけることができるでしょう。